２００３年12月

冬合宿事故報告書

信州大学山岳会

はじめに

２００３年冬合宿にて事故が発生しました。幸い事故者は全くの無傷であり、一安心ではありますが、その事故の状況を察するに最悪の状態も彷彿とさせるものでした。ご心配をおかけした方々に深くお詫び申し上げます。今回の事故が我々に示したことを謙虚に見つめ、そこから得た教訓を風化させぬよう、ここに報告書を作成します。

佐藤　祐樹

—目次—

はじめに　…２
計画の概要　…３
事故の概要　…４
行動記録　…５
事故分析　…１０
報告　…１３
終わりに　…１５

＜計画の概要＞

場所　北アルプス槍ヶ岳～常念岳

期間　2003年12月23日～1月5日

参加メンバー　L佐藤祐樹（4年）SL片寄哲生（3年）高谷英太郎（2年）
三森岳志（2年）小尾智明（1年）高橋昭彦（1年）
加藤なゆ樹（1年）畠中洸（1年）　計8名

山行日程　実働8　予備6

12月23日　松本＝中の湯～横尾T.S

12月24日　T.S～横尾尾根～P5付近T.S

12月25日　T.S～大喰岳～槍の肩T.S⇔槍ヶ岳

12月26日　T.S～東鎌尾根～西岳ヒュッテT.S

12月27日　T.S～大天井岳～大天井ヒュッテT.S

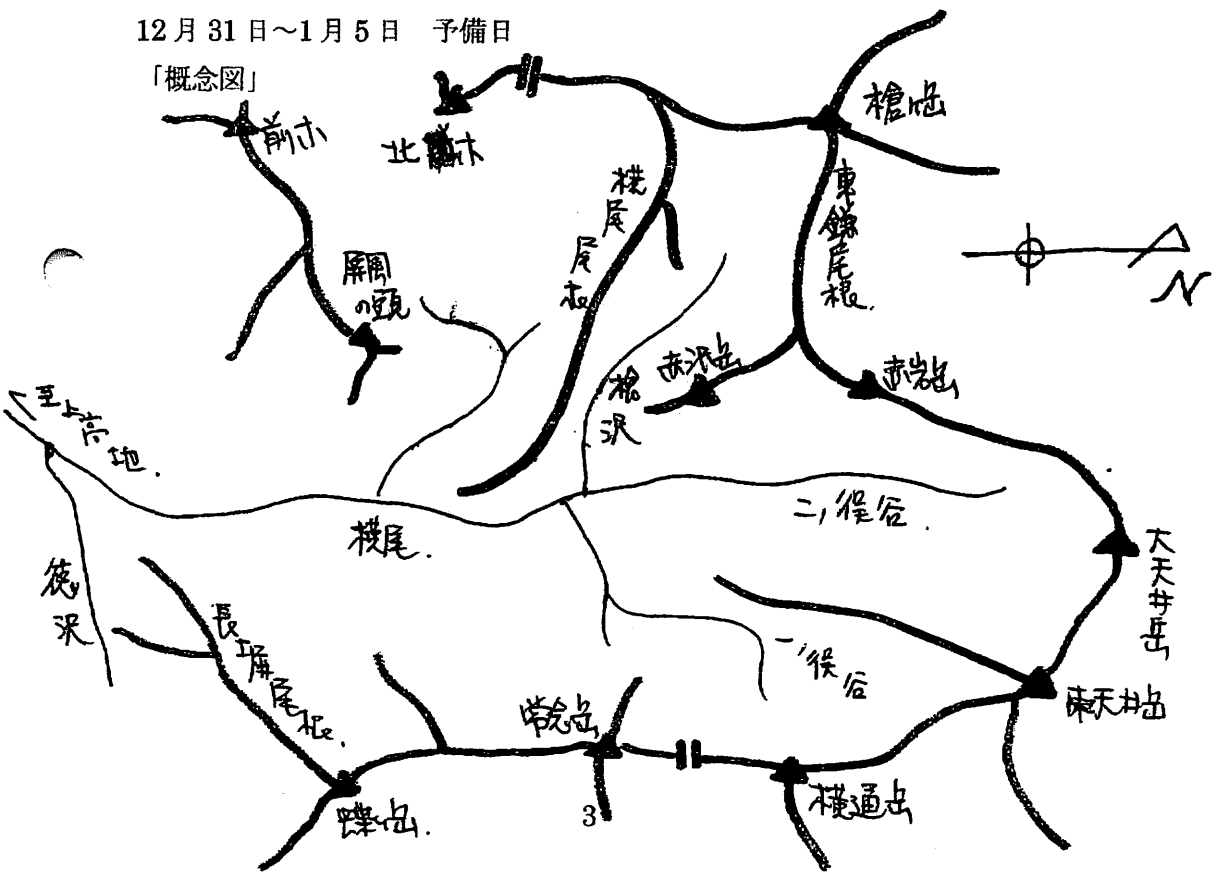
12月28日　T.S～常念岳～蝶ヶ岳～蝶ヶ岳ヒュッテT,S

12月29日　T.S～長塀尾根～上高地T.S

12月30日　T.S～中の湯＝松本

12月31日～1月5日　予備日

「概念図」



＜事故の概要＞

事故者　　畠中　洸（1年）

事故発生日時　　2003年12月29日7時20分

事故発生場所　　東鎌尾根２９００m付近（ヒュッテ大槍上）

天候　　晴れ、風やや強し

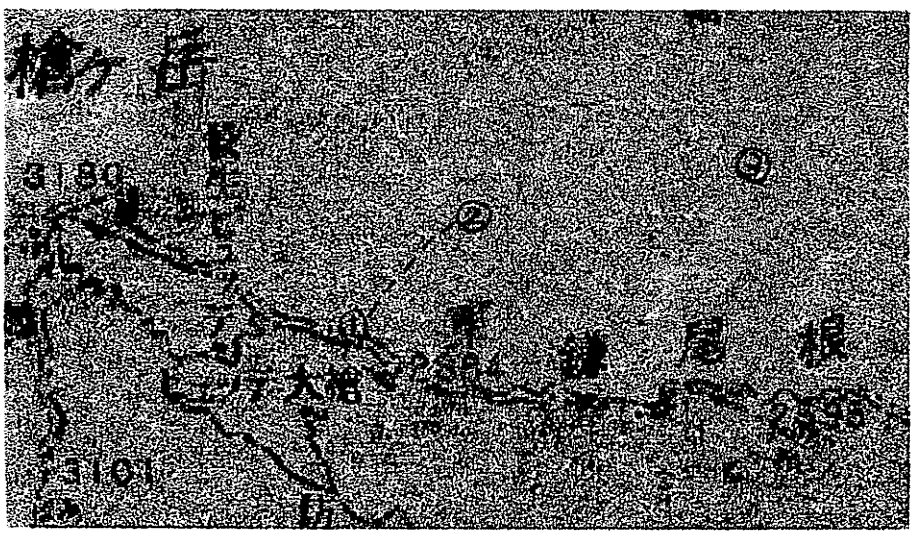
事故発生状況

東鎌尾根の危険個所通過後、尾根上のクラストした平坦地で畠中が滑落する。天上沢方面のルンゼを滑っていく。２６００m付近の、傾斜が急に緩やかになった雪崩斜面で止まる。２６５０mより下部はふかふかの雪崩斜面で、２～３mの岩と氷の壁を挟んだその上、２６５０m～２９００mまではクラスト斜面である。ルンゼ内の露岩は少ない。滑落距離は３００m。

事故の経過　　上級生２人での探索、発見後、全員で自力下山。

事故者の状態　　全くの無傷

「事故概念図」



① 事故発生場所

② 滑落停止場所

③ ザック位置

＜行動記録＞

入山前

計画の参加メンバーの内、加藤なよ樹（１年）が退会し、高谷英太郎（２年）がインフルエンザにより不参加となり、計６名での合宿となる。

事故前日まで

１２月２３日　松本＝中の湯～横尾

晴れ。徳沢からはトレースがついていなかった。１年生は慣れないラッセルで苦労するが横尾には暗くなる前につく。

１２月２４日　横尾～２のガリー～横尾尾根 P3

曇りのち雪。朝から晩までひたすらラッセル。P3 の登りもお助けシュリンゲが出る。暗くなる直前まで動いた。

１２月２５日　横尾尾根 P3～P4～P5 手前のコル。

晴れ。P3 の下りには切れたナイフリッジがありそこで時間を要した。後はひたすらラッセル。P4 でも所々でお助けシュリンゲを出す。

１２月２６日　横尾尾根 P5 手前のコル～横尾の歯～天狗のコル
⇔デポ上げ

一日中、雪が舞っている。横尾の歯でフィックス。天狗のコルより上部も深いラッセル。稜線にたどり着けずに荷物をデポし天狗のコルで幕営。

１２月２７日　沈殿

一日中、猛吹雪。特に昼の風が強く、昨日のうちに作っておいたブロック（防風壁）が壊され、堅牢な壁に作り直す。

１２月２８日　天狗のコル～中岳～槍ヶ岳山荘⇔槍ヶ岳

晴れ。一昨日の雪は風で飛ばされ、足早に稜線へ。やっと着いた槍ヶ岳に皆の顔がほころぶ。

事故当日

１２月２９日

６：３０　槍ヶ岳山荘出発

晴れ。風はやや強い。日の出と共に出発する。１年生はハシゴやクラスト斜面のトラバース、下降を上級生の指示を受けながら進む。隊列は片寄、畠中、三森、高橋、佐藤、小尾の順で、まず上級生が通り、指示しながら１年生を通す方法で進んでいた。大槍ヒュッテが眼下に見え、ヒュッテまではもうそれほど危険個所はないと感じていた。

７：２０　事故発生

２９００m付近に到達し、片寄は畠中が落ちた尾根上のクラストした平坦地から槍沢側にクライムダウンで降りていた。その平坦地は特に天上沢側が切れ落ちていて、決して落ちてはならないような場所であった。しかし、幅が２mくらいの比較的安定した場所であるため、片寄は特に見る必要はないと判断し、槍沢側のクライムダウンに移っていた。片寄は畠中の声で後ろを振り返ると、畠中がすでに天上沢側を滑落しているのを目撃する。途中で畠中の姿は見えなくなるが、片寄は畠中の位置を確認するべくルンゼ内をしばらく見つめる。一方、高橋が畠中の滑落の瞬間を目撃している。彼の口述によると畠中は山側を頭にして前のめりにして倒れた。天上沢に吸い込まれるようにきれいに落ちた、とのことである。小尾を見ていた佐藤がルンゼ内を見つめる片寄に気付き、状況を把握する。すぐ下の安定した場所で高橋、小尾、三森を待機させ、佐藤と片寄で畠中を救助することを話す。ツェルトを１年生に被らせ、高橋に記録を頼み、三森とシーバーの時間を決め、すぐに佐藤、片寄は出発した。ここからは①畠中の行動、②佐藤、片寄の行動、③佐藤、片寄、畠中の行動、④三森、小尾、高橋の行動、と四つに分けて書く。

①畠中の行動

７：２０　滑落　　７：３０　佐藤、片寄と合流

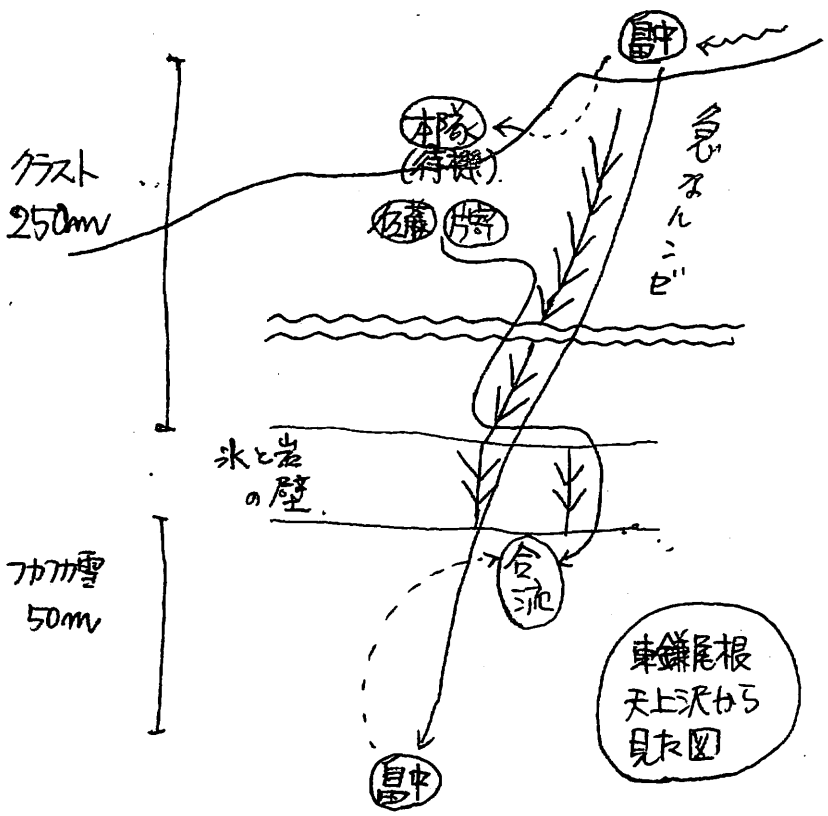
最初はうつ伏せ、頭が山側の状態で滑っていたが、途中回転し、最終的

にあお向け、頭が谷側の状態になっていた。ザックがソリの役目を果たし数度飛んだ後、緩傾斜の雪崩斜面で止まる。その間すべて意識があり、ピッケルはずっと握ったままであった。しばらく（本人曰く５秒くらい）の放心後、ザックのバックルを外す。ザックはそのまま滑り落ちていった。周りが雪崩斜面だったことから２０ｍ上の岩の基部まで登り返そうとする。その途中、片寄を確認。片寄と口頭で怪我の確認をしている間に、佐藤が２，３ｍの岩と氷の壁を下り畠中と合流した。

②佐藤、片寄の行動

７：２０　事故発生　　７：３０　畠中と合流

三森、小尾、高橋と別れ、急なクラスト斜面を佐藤が先行しダブルアックスで下っていく。２３００ｍ付近のルンゼで止まっている畠中のザックを確認する。さらに下ると畠中を確認し、雪崩斜面中の岩の基部で合流した。



③佐藤、片寄、畠中の行動

７：３０　畠中と合流　　８：２０　三森、高橋、小尾と合流

合流後、畠中の怪我の具合を調べたが何一つなかった。また、畠中はショックは受けていたが、元気な様子であった。ザックは３００ｍ下に確認したが雪崩を危惧し、片寄、佐藤の話し合いの末、あきらめた。登り返して東鎌尾根に戻るのか、南西にトラバースして戻るのか悩んだ。登り返すには２，３ｍの岩と氷があり、事故後の畠中には不安を感じた。トラバースするにも雪崩斜面を横切らなくてはならず不安である。そこで、弱層テスト行ったところ、１５ｃｍ下に弱層が見つかった。よって、進路は登り返すことにした。畠中にバイルを渡し、ダブルアックスで壁を越えさせた。後は急なクラスト斜面を登り返し、三森、高橋、小尾と合流した。

④三森、高橋、小尾の行動

７：２０　事故発生　　８：３０　佐藤、片寄、畠中と合流

佐藤、片寄と別れた後、ツェルトを被り待機。小尾が多少慌てていた。三森はたまに斜面を眺め、様子を窺うが見えない。しばらくして、登り返してくる佐藤、片寄、畠中を確認する。その後、全員無事合流。

８：５０　槍ヶ岳山荘に向け出発

全員合流後、２０分ほど休憩を挟む。畠中、小尾にツェルトを被せ、テルモス内の紅茶を飲み、レーションを食べさせた。畠中がザックを落としていたことと、隊の精神状態を考慮し、計画続行は不可能と判断。畠中の潜在的な傷（打ち身、脳内の打撃）の可能性はあったが、畠中が元気であることと無傷であることを考え、自力下山をすることに決定した。事故の地点、畠中のいた地点、ザックのあった地点を地形図上で確認した。その後、出発。

９：４５　槍ヶ岳山荘

山荘まで慎重に登る。山荘には中崎尾根から登ってくるパーティーがどんどん登ってくる。佐藤と片寄の話し合いの末、中崎尾根に下降路をとる

ことにした。エスケープには入っていないのだが大喰岳西尾根よりはトレースが期待でき、早く降りられる。これからは比較的容易な自力下山が望めたため、留守には下山してから報告することにした。このころには皆の顔に笑顔が戻ってきた。

１５：２５　中崎尾根２１００m付近T.S

千丈沢乗越手前から天気が荒れ始める。しかし、下からはどんどん人が登ってきて、トレースは明瞭についていた。トレース沿いに下れる所まで下り２１００m付近に幕営した。畠中は非常に元気で飯もよく食べる。寝袋がないので、佐藤と２人同じ寝袋で寝ることになった。

事故当日後

１２月３０日　T.S～新穂高温泉＝松本

昨晩の雪でトレースは消えるが、早く降りることができる。新穂高温泉に迎えに来てもらい、皆、無事帰松した。

＜事故分析＞

事故の原因について

①畠中の気の緩み

前述したように畠中が落ちた場所は平坦であり、フィックスを張るような場所ではない。むしろ、その場所の直前の方が長いカニ足トラバースをした悪場であった。危険個所通過後、気の緩みが生じたことが考えられる。また、畠中自身が後に話しているが、その個所にはそれほど危険意識は感じなかったという。この気の緩みが畠中に及ぼした影響は大きいであろう。それはまた、上級生が１年生の緊張を持続させることができなかったという大きな反省につながる。それにしても、様々な報告書を読んでも「気の緩み」という原因は数多く存在する。気の緩みやすい状況は下山時、危険個所通過後、朝の１ピッチ目が特に多い。そして今回はその状況の２つに合わさっている。稜線上では気の緩むべき場所は一本のときだけである。また、人によっては気の緩める所はないと言うかも知れない。稜線上では常に冷たい強風にさらされ、落ちれば止まらない場所が常である。そんな所で気の緩ませることがあってはならない。

②上級生の注意不足

畠中の歩き方に関して上級生はそれまでの横尾尾根の登り、槍の穂先の登りを見て、安心して見ていられる安定した登りをしていたと感じていた。一方、上級生は小尾の歩き方が危ないときがある、と神経を尖らせていた。よって、上級生の注意が小尾に集中し、畠中に小尾以上の注意がなかったことは事実である。上記のように気の緩みやすい条件に当てはまっている状況で１年生皆に第一級の注意を払えなかった。上級生に大きな反省があると言える。

また、この注意不足は上級生の人数不足からも必然的に出てしまう。トップの片寄は眼下のルーファイと畠中両方に注意をしなければならず、少なからず注意が分散していた可能性がある。

③なぜ転んだのか

この直接的な原因に明確な答えはでていない。転んだ場所は平坦地でアイゼンがスリップすることは考えられない。比較的硬いクラストではあっ

たが畠中のアイゼンは十分に尖っていたので、刺さらなかったことも考えにくい。スパッツ、ハーネスにひっかけたことも考えたが、事故当事者、目撃者双方に聞いても違うという。強風が吹いた、重たい荷物を持っていたわけでもない。しかし、転んだことは間違えようのない事実である。

④初期制動の指導失敗

初期制動とはバランスを崩した、または落ちた瞬間にピックを突くことである。ピッケルストップも重要であるが、加速がついてからでは意味がない（特にクラスト斜面において）。よって、初期制動の重要性が増してくる。一昔前までは「ピックの向きは登りが前、下りが後ろ」というのが定説であったがそれは間違いである。特に下りにおいて前に持ったほうが良い場合が数多くある。去年の剣岳の事故以来、初期制動の重要性は多く語ってきたと思っていた。しかし、畠中は初期制動の意識を全く持っていなかった。これも上級生の注意不足のひとつであり、現場で初期制動のことを意識させておけば今回の事故は防げた可能性がある。

⑤１年生の事故の意識欠如

事故を体験したことのない者に「事故は身近なものだ」といっても本質的に理解できるものではない。我々は事故報告書や様々な事故に関する本を薦めるが、読むことを通じての体験はできるが、やはり空論でしかなく、実体験には到底及ばない。我々に言えることはたくさん山に行き、たくさんの経験値を積む事しかない。それで死んでは仕方がないのだが。

ただ、難しいことは承知で、指導的、監督的立場の上級生は下級生に事故を意識させることは重要なことであり、その努力は決して怠ってはならない。

⑥クラスト斜面に慣れていなかった

毎年、冬合宿前は八ヶ岳に登りに行くことが多い。これが合宿前のいい経験になっていた。今年は暖冬で八ヶ岳の氷結状況が悪く、またテン場代、駐車代と費用が多くかかるため、行かなかった。有明山には行ったが特にクラスト斜面はでてこない。また、プレ冬は毎年の事ながら冬の状態とは言い難く、後立の稜線を雨の中グサグサの雪で登った。プレ冬では合宿前としては足りない。合宿前はそれを見越した山行計画が必要である。

事故後の処理について

①救助の装備について

下の畠中の様態がわからない以上、ツェルト、テルモス、医療缶、レーション・昼飯、ロープ等の基本的救助装備は持っていくべきであった。

②トランシーバーについて

救助時は常時開くべきである。特に救助者の状況、判断は刻一刻と変化する。待機している者もその状況、判断を把握していなければ、救助者に何かあったときの対応が取れない。

③エスケープ変更について

エスケープの変更時点で留守に一報を入れるべきであった。

＜報告＞

事故者　畠中洸から

その日は朝焼けがとてもきれいな日だった。その日の行程は槍ヶ岳山荘から西岳ヒュッテの予定だった。１ピッチ目から危険な行程であるということで、歩き始めてすぐに「最初から気を引き締めていけ」というような指示が出ていた。僕は先頭を行く片寄さんの後ろについて歩いていた。初めのうちは「怖い」「危険だ」という印象を受けていた。しかし、事故現場のあたりにさしかかった頃には、今考えると、少し慣れが出はじめて来ていて、気も緩んできていたように思われる。

その場所はさほど危険な個所には感じられなかった。僕はその地点を通過しているとき、気づいたら斜面を滑り始めていた。肝心の滑落の直接原因は全く憶えていない。滑りながら何度か体が宙に浮いた。死ぬのかな、と思った。岩にぶつかって気を失う瞬間をいつ来るかいつ来るかと待っていた。結局岩にはぶつからず自然と体は停止した。ザックが体にあったため、これをまず、はずす必要があった。はずすとザックはさらに滑り落ちていった。次に僕は雪崩が怖いと感じ、雪面上に岩がごつごつしているあたりを目指して登った。そうしていると片寄さんの声が聞こえた。そこで佐藤さんがこっちに向かってくれていることを知り、待った。合流後、片寄さんも降りてきて脱出経路を決定した。本隊と合流してやっと少しホッとした。少し安心するといろんな気持ちが湧いてきた。申し訳ないという気持ちが強かった。また仲間のありがたみや心強さを感じた。一人じゃなくてよかったと深く感じた。また、佐藤さんと片寄さんが救助に来てくれた時、雪崩に巻き込まれる事だって決してあり得ないことではなかったと思う。事故を起こしたら、大事な仲間を危険にさらすことになったり、多くの人の心を傷つける可能性があることを思った。せっかくたすかったのだから、今回の事故を今後につなげない手はないだろう。再び事故と出会わないためにも。

冬合宿リーダー　佐藤祐樹から

今、４年前の剣岳の落石事故を思い出している。自分の起こした事故である。大きな浮石、自分を負ぶった上級生の背中、そしてヘリから見た美しい剣岳。記憶は今だはっきりと頭に焼き付いている。上級生や、OB の方々に申し訳がなく、ひたすら謝罪と感謝の気持ちでいっぱいだった。あの事故により、１年生の自分は山岳会に恩返しをしようと強く決心した。その心は４年後の今でも残っている。もちろん、今では恩返しのために山に登っているわけではないが、少なからずまだ残っている。そして今回の事故。情けないの一言である。自分は今回、事故に対して細心の注意を払ったつもりでいただけに、事故のショックは大きい。事故が一応の収束を見たときからずっと自問自答している。「なぜ事故が起きたのか」そして「どうしたら事故が起こらないのか」

この問いには思わず目を背きたくなる。「山に行くな」という逃避的な考えになるからだ。登山、その行為自体が危険への第一歩である。山はでかい。山が本気になれば、とうてい人間の勝てる相手ではない。それでも山に行きたい大馬鹿者は己を磨く向上心と山を理解しようとする飽くなき追究心だけは決して疎かにしてはいけない。それを怠る者は登山の資格さえないのではないか。

もうひとつ重要なことは向上と追究の過程で監督、指導的立場にある上級生は下級生に対して大きな責任がある。よって、下級生のみの過失である事故はまずありえない。其の背景を探ってみると上級生側の問題がかえって大きく反省される。下級生をそこまで見るのか…と思うかもしれないが、上級生の限界つまりは指導の限界というものは存在しない。其の指導が相手の性格、特徴にまで至るにしても上級生が危険と感じる以上、決してあきらめるべきではない。人を変えるのはとてつもない難作業ではあることは百も承知であるが、高い責任意識を持っている者は相手にどんどん干渉するであろう。大学山岳部の一つの面白みでもあると感ずる。上級生として、その大きな責任をいつ何時も忘れてはならないものだ。

そして畠よ…擦り傷一つなくてホントに良かったなぁ。また、一緒に山に行こう。

終わりに

今回の事故直前、山々は見事に燃え、神々しいほどの美しさを我々に見せてくれました。あの１ピッチ目、山の美しさと怖さ、そしてそれに対峙する人間の小ささを感じたのと共に、謙虚な気持ちが素直に受け入れられる瞬間でありました。

今回の事故で得た教訓を胸に我々はまた山に向かい合っていきたいと思います。最後になりましたが、いつもあたたかく見守ってくださる OB の方々に深く御礼申し上げます。

２００４年１月２日

信州大学山岳会代表　佐藤　祐樹